

## 繋がりにくいケータイ

朝倉 健一

最近のケータイ電話の進歩は凄まじいものがある。

私個人としては、音声聞き取りづらかったり、通話中にブチブチ切れていた昔のケータイが好きだ。そりゃ綺麗な女性から「ねえ、今夜どうしているの？」なんて電話が頻繁に掛ってくるような幸福な人なら、音声や感度的にも優れたケータイが欲しいと願うだろう。が、私（会社での仕事は営業）のように掛ってくる電話のほとんどが「ゴラー、貴様っー」の枕詞で始まり、「納期は過ぎているぞーとか、「今すぐ来い」とか、そんな仕事のクレームばかりだったりすると、機能性なんてどうでもいいし（だからこそ繋がりにくいケータイがいいのだ）、ケータイなんて金魚鉢の中にも放り込んでおけという気持ちになる。

会社の上司であるM所長。この人は外出するとき会社にケータイを忘れる常習犯である。迷惑なのは会社に残された社員達である。彼のケータイに掛ってきたクレームを代わって引き上げる羽目になる。彼が外出するときは、女子社員達が彼のケータイを持って、彼の後をいつも追いかけている。「すまん、すまん、ついうっかり」と、彼は頭を下げるが、うっかりである訳がない。「持った持っ

た」と言いながら、こっそり机の書類の下に隠して出て行くこともある。普通の電話でも都合が悪いと部下を盾にして居留守を平気で使う輩である。ケータイなんてバカバカしくて持つ気にはなれないのだろう。ある日のこと、会社の男子便所にケータイを置き忘れてた。彼女達は支社部長に所長の態度を直訴した。その結果、所長は首からケータイを紐で吊しておくよう部長から言い渡された。

「首輪だな」と、所長は肩を落としていたが、自業自得である。

「大変でしたね。元気出してください」

私は笑い死にしそうになるのを抑えながら、ひどく同情しているような口ぶりですう言った。

「参ったよ。オレはケータイ発明した奴を恨むね」

と、所長は力なく苦笑した。

「お前もいずれわかるところが、オレくらの立場になると、いろいろとあつてな、ちゃんとした返事ができないときもあるのさ。逃げなくてはいけません。でも、ただ逃げているのではない。逃げながら、何か良い方法はないかと模索しているんだよ。ベストな方法がないものかと。オレは、いい加減な返事はしたくない。いい加減な仕事もしたくない。わかるか？」

「勝手な言い分だが、所長の言いたいことも

少しはわかる気がした。私が会社勤めを始め  
た頃、まだケータイはなく、ポケベルだけ  
だった。あの頃はポケベルが鳴ると、会社に  
電話を入れ、用件を聞き、それから取引先や  
客に公衆電話から電話を入れていた。今より  
も時間的に余裕があった。相手がどういう用  
件で、自分に電話を掛けてきたのかも見当が  
ついたし、こちらもそれに対して、きちんと  
した返事が用意できた。

しかし、今のようにケータイで問答無用に  
相手から、いきなり用件をまくし立てられる  
と、私のような頭の回転の鈍い者はパニック  
になつてしまふ。即答を求められても答えら  
れない。

また、次から次に用事が割り込んでくるの  
で、仕事の優先順位を常に軌道修正しなけれ  
ばならない。自ずと仕事も時間も細切れに  
なつてしまふ。着信番号が表示される前なら、  
電話に出ないことも可能だったが、着信番号  
が出る今となつては、たとえ運転中であつて  
も電話に出て対応しないと気分を害する人  
も少なくない。

つい最近、会社から持たされているケータ  
イが壊れた。嬉しくて、しばらくはそのまま  
で過ごそうか思ったが、早くどうにかすると  
会社から催促され、私はケータイショップに  
渋々出かけた。

そこで私は店員の女性に恐る恐るこう訊  
ねてみた。

「あのおう型遅れで、できるだけ繋がりにくい

機種つてあります？ 新古品、今ふうに加え  
ばアウトレットもの……」

彼女の表情が固まった。無理もなかった。  
自社製品の最新機能について自慢気に説明  
していたところだったのだ。

「嘘ですよ。嘘。気にしないでください」

私がそう言うと彼女は安心したように  
笑った。店の中は高校生くらいの子達であふ  
れていた。ケータイで繋がっていた世代だ。  
そんな連中を相手にしている彼女に、私のよ  
うなケータイで繋がれたくないサラリーマ  
ンの事情を話してもわかるまい。彼女がまた  
最新機能について説明をはじめた。私は学校  
で先生から生活指導を受けている中学生の  
ような気分だった。

(了)